

## 要旨

本研究は、10例を対象に、小児専門病院救急外来総合診療科において行った看護援助のうち6例についての、問診および診察から家庭療養指導までの展開過程と結果を詳細に記述した事例研究である。【研究目的】は、小児救急外来における繰り返す受診や、複雑な背景を持つ子どもと家族の様子と看護援助を分析することで、子どもや家族が総合診療科において必要とする看護援助を明らかにし、小児看護専門看護師の役割について考察することである。【研究方法】は、アセスメントシートをもとに記述した実習記録を用いて、ケアの分析を行った。対象の事例は、トリアージレベルが準緊急、準々緊急、非緊急の子どもで、トリアージが済んだ段階で救急外来患者一覧より対象となる患者を抽出し、子どもと家族への配慮を十分に行い実施した。1.事例の概要 2.現病歴 3.身体所見と受診時の親と子ども様子を知り 4.アセスメントを行い、5.問題の抽出、6.実際のケア内容、7.ニーズを分析した。すべての【対象】は発熱、下痢、嘔吐、咳嗽、鼻汁、足背腫脹など、小児の一般的疾患を主訴とし、基礎疾患に超低出生体重児、極低出生体重児、心室中隔欠損症、二分脊椎、急性リンパ性白血病などがあつた。全事例に共通した問題は、主症状のほかに、家庭療養において、なんらかの複雑な背景を有していることであつた。

問題の抽出には、フィジカルイグザミネーションや系統的な問診から、評価指標を利用したアセスメントを行った。診察の後に再び、適切な家庭療養を送るために、小児の一般的疾患に特化した指導及び家族支援シートを用いながら、抽出した親のニーズに沿ったホームケア指導を行った。【結果】小児専門病院総合診療科を受診する親と子への援助においては、基礎疾患を考慮した看護援助を子どもと親に行い、子どもの発達を考慮しながら、一般的疾患に罹患し受診をした場合には、それを好機と捉えて子どもに分かる説明を的確に行うことが必要であることが分かつた。親と子の様子から、新たな継続する問題を見出された場合には、その解決のために、再度アセスメントを行い、解決できることは実践し、専門外来や専門職者との協働を行う必要がある。小児専門病院救急外来総合診療科でこれらの援助を行うためには、限られた時間の中で、どのような対象に対して、特別な援助をされるべきニーズを持った親と子であると判断し、適時に、的確な援助を行うのかを考えていく必要がある。